
言葉では言い表せられない

快丈風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉では言い表せられない

【Nコード】

N5100A

【作者名】

快丈風

【あらすじ】

彼女と俺との出会いは正に「運命」だった。本当にそうかは分からないが、それ以外にこの気持ちを上手く伝えられないんだ……。

毎週土曜日の午前10時30分……。俺は必ず図書館に行く。彼女のために。

彼女は何時も決まって奥から2番目、6人掛けの机の本棚側に座っている。そして俺は、そこから対角線上に座る。

彼女は毎週図書館で勉強をしている。度のキツそうな眼鏡をかけ、Tシャツにジーパンというラフな格好で黙々と勉強をしているのだ。

俺が彼女を知ったのはほんの1ヶ月前。その日は蒸し暑い日で図書館が混んでいた。席が空いていなかったで、俺はたまたま空いていた彼女の向かい側に座った。

小説を読む俺がふと顔をあげたとき、彼女はやっぱり今と同じ様にペンを走らせていた。

何故だろう……。その姿が急に気になった。目をそらそうにも、させない。

電気が走った。

正に衝撃だった。

彼女は特別綺麗な訳でもなく、むしろ流行とかには疎そうな方で……言葉ではつきり言えないが、彼女の何かが気になって目が離せなくなっていた。

俺は彼女に心を奪われたんだ。

告白や付き合うなんて望んでいない。ただ、彼女の姿を見ていた……。その一心で図書館に通いつめ、彼女は土曜日のこの時間に来ると分かったのだった。

そしてこれが、俺の日課になった。

名前も、学校も、年も、住んでいる所も知らない。でも……何故か気になる……。

一歩間違えばストーカーかなあ……。

そんな事をぼんやり考えながら、また目が彼女を追う。手を伸ばせば……声を伸ばせば……届く所に居るのに……。

そして、俺は彼女の気配を感じながら物語の世界に入り込んだ。

「あなた、毎週会いますよね？」

不意に向かい側から声がした。慌てて顔を上げると、目の前にはあの彼女がいた。

「えっ……いやっ……」

俺は口ごもりながら言葉を探していた。なんで彼女が……いつの間に向かい側に座っていたんだ？ いや、そんな事よりも俺のこと、気付いていた……？

「ここ1ヶ月かな……毎週この席に座ってますよね。本が好きなですか？」

彼女は左右に小さなえくぼを作りながら俺を見た。初めて聞いた彼女の声は、想像以上に柔らかく俺の心を包み込んだ。

「本、好きです。……あの……」

俺の頭は既に真っ白だった。何も考えられない。

そのせいか、自分でも思いもよらない事を口ばした。

「素顔……見せてくれませんか？メガネの下の……」

「えっ……？」

どう反応すれば良いか分からない顔の彼女。俺は我に返り、

「すいません、失礼ですよねっ……」

と言つて顔を伏せた。

自分でも段々冷静になり、恥ずかしくなってきた。なぜ初対面の俺に、彼女が素顔を見せないといけないのだ。よりによって、やつと口から出た言葉がこれでは、完全に変な奴だ……。

でも……なぜか気になったんだ。彼女の眼鏡を外した顔が……。見ないといけない気がしたんだ。何故か……。

すると彼女はクスツと笑つて俺に向かって言った。

「私が眼鏡をとったところを見せるのは、私が本当に好きになった人だけなの」

そう言つと彼女は微笑みながら自分の席に戻った。

……今のつて、どういう意味だ？なら、彼女が俺の事を好きにな

れば……可能性はあるのか？

俺は自分でも分からないが、急に立ち上がり彼女の側へ行った。彼女は少し驚いていた。

「さっきは失礼しました。もし良ければ、名前を教えてくださいませんか？」

と俺は彼女に尋ねた。すると彼女は、

「後藤明日実あすみよ。因みに高2。アナタは？」

と言つて俺を見た。

「棚橋龍一たなはし りゅういち……中3です」

と少し自信無さそうに答えた。彼女が年上だったという事実には怯んだからだ。

しかし彼女は、

「また来週、会いましょうね、棚橋君」

と言つて席を立ち、図書館を出ていった。

この気持ちは何なのか分からない。不思議な感覚だ。言葉にあらわせない。

でも、あえて言うなら……”運命”。今の俺にはそれしか思い付かないんだ。

俺は今日、絶対に彼女の素顔を見ると決めた。その時はきっと、この気持ちにもっとふさわしい言葉が思いつくだろうから。

（後書き）

いかがでしたか？とりとめの無いカンジでしたが、「運命」についての話を書きたくてこの話を書きました。自分でも理解しきれない面もありますが、精一杯書いたつもりです。ここまで読んで下さってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5100a/>

言葉では言い表せられない

2011年1月9日03時19分発行